



卓 話



「聖書で読み解く「エコロジー」 と「エコノミー」

青山学院大学講師 野村 祐之氏

今世界が直面している最大の危機、それは地球温暖化を始めとする環境問題と国際的不況をめぐる経済問題が複合した状況でしょう。そこではよく「エコロジー VS. エコノミー」という図式が描き出されます。これは人類が初めて経験するグローバルな、中国語式に言えば「全球的」大問題であります。また専門家集団に任せておけば解決してもらえる問題ではなく、ひとり一人が日々の生活の中で小さな努力を積み重ねなければ道が開けないという点でも人類史上初の同時進行型共有体験といえるでしょう。



ポジティブに受けとめれば、いま人類にそのチャンスが与えられている。もしかすると唯一にして最後のチャンスかも知れませんが・・・。

今日は、もしかするとこの問題解決のカギになるヒントをお示し出来ればと思っております。

そのキーワードは何か。ひと言でいえば「エコ」であります。なーんだ、いまさらとお思いかもしれませんが。でも「エコ」ってどういう意味かご存知ですか。そう、エコロジーのエコですね。でもエコノミーだってエコです。どちらなのか。それとも両方もか。そう正解は後者、「どちらも」です。コツはこの両者をVSではなくANDで結ぶことです。「エコロジーANDエコノミー」。そしてこの両辺を同時に満足させるシステムを構築すればいいわけです。それは「経済が発展すればするほど環境が良くなる」というシステムです。

楽観的に過ぎ、現実離れした夢物語でしょうか。実はこれにはネタ本があるのです。聖書巻頭の「天地創造」の物語です。これはキリスト教のみならず、ユダヤ教イスラム教の人達も大切にしている物語です。人類の三分の一がキリスト教、モスLEMが約2割ですからそれだけでも人類の半数以上が共有する物語です。

創造主が7日間で天地を創られたという一週間の紀元となる話ですが、全体像を確認しておきましょう。

1日：光と闇の分離 4日：昼の日と夜の月星

2日：海と空の創造 5日：海の魚と空の鳥

3日：陸と植物の創造 6日：陸の動物と人間

7日：神の安息の日(聖なる日=ホリデイ)

7日目の神の安息に支えられ、世界は左右対称の3階建てになっています。一番上に宇宙の広がり(第1、4日目)、その下に海と空とその生き物(第2、5日)、そして陸上の動植物達と人間です(第3、6日)。

この世界像が提示しているのは、この世の全ては神に創られた兄弟姉妹、世界という一つ家に住む家族だという考えです。中でも人間はいちばんの末っ子。他の全ての存在が兄さん姉さんだということです。そしてすべてがユニークで自分らしさに輝き、しかも互いに調和し安らいでいる。これは聖書の提示する「平和(シャローム、サラーム)」の姿でもあるのです。

中世イタリアの聖フランチェスコ(サンフランシスコの名の由来)は太陽をお兄さん(ブラザーサン)、月をお姉さん(シスタームーン)、そして大地を「姉にしてお母さん」と呼んだことで知られています(「太陽の賛歌」)。みんな神の家族、世界全体が神の家なのです。

家に住むに当たっては、自宅であれホテルであれ大切なことがふたつあります。まずは入口はどこか、食堂、トイレ、自分の部屋はどこか、その家の成り立ち、秩序を知ることです。またその家なりの約束事、ルールもあるでしょう。住人がそれを守ることも大事です。家の成り立ちを知り、ルールを守る。そうすれば我が家であれ国家であれ、みんなが楽しく暮らせませす。

これをギリシャ語でいいますと家(エコス)の秩序(ロゴズ)は「エコロギア」。英語のエコロジーです。家(エコス)のルール(ノモス)は「エコノミア」。エコノミーの語源です。福沢諭吉はこれを見事な日本語に訳していますね。「国という家の約束事」、それは「世の中をやり繰りして、民草を救済すること」だと観て、「経世済民(或は経国済

民)」、それを縮めて「経済」としたわけです。「経済」イコール「金儲け」だなんて、福沢さんに顔向け出来ません。まあ現代人は正直その程度かもしれません。それが証拠にエコロジーはもっぱらカタカナ書きで、諭吉先生にお見せできるような訳語がありません（「環境」はエンバイロメントの訳）。そして意味も知らずに「エコ」の大合唱です。

エコロジーとエコノミーは世界という車の両輪です。どちらがパンクしてもその場でえんこ、頓挫してしまいます。この両輪を一本の車軸で結んで(それがANDです)持続的に走らせ続けなくてはなりません。

ANDの状態とは、先程申しましたように「経済が発展すればする程、環境がよくなる」ということです。

そんな都合のいい話があるのでしょうか。ひとつ具体例を挙げましょう。りんごの木があります。この木がこの世で生きていく上でのルール、すなわちエコノミーは、葉っぱという効率のいいソーラーパネルで太陽エネルギーを取り込み、根っこから吸い上げた水分や栄養と化合させ、右肩上がりの成長を続け、4半期ごとにイベントを提供し、春には花を咲かせ甘い香りと蜜で顧客満足をはかりながら口コミで花粉を広めていただく。その「結果」の「成果」物も自己の利潤とせず、さらなる顧客受益に奉仕し、カプセル入りの種子だけは遠くへ運んで肥料付き！で蒔いていただく。

こうしてりんごの経済が発展すればする程、環境が良くなっていく、という仕組みです。生産過程でも炭酸ガスを吸収し、排気ガスだって酸素ですからね。動物の生命を支え、環境美化に奉仕しています。

これ、りんごに限った事ではない。実は自然界、一つの例外を除いてみんなそうなる。その例外というのは「人間のする事為す事」です。創世記では、神が人間だけに「支配せよ」と命じています。そのせいで環境破壊が引き起こされた、なんて言いがかりを本気で書いてる専門家もいます。

支配」というのは名訳だと思ってます。字をよく観てください。「支え配る」と書きます。支持、支援の支、「支える」というのは他の人や物の為にすることです。「配る」も、何かを他人に手渡すことです。物にしる、心や気を配るにしる、相手の為を思ってです。支配と専政、独裁とは正反対の行為です。自分の

ことはさて置き、顧客や部下への支援、配慮ができてこそその「支配」人です。神は人間を見込んで地球の支配人役を任せられた、と聖書はいうのです。

中にはその利権で自己利益の確保に走り、「経済」所詮は金儲けなんていってる内に、金儲けが自己目的化して心も生活もボロボロになってしまったりということもある。何でも自分の手中に確実に戻ってこないと許せないブーメラン人間の頭の中はエゴのみ。その結果はエコノミーならぬ「エゴノミ」です。

エコロジーだって同じこと。人類が危ないというだけでは人間のエゴ。「地球に優しい」を気休めに、「ゴミも出ないようじゃ経済発展がね」という自己正当化。分別努力もしてるし…という自己満足。これではエゴ中心に論じるだけの「エゴ論じ=エゴロジ」。「エゴロジANDエゴノミ」では救われるモノも救われません。

キーワードはエゴから解放された「エコ」です。自分（エゴ）はさておいても家（エコス）のこと、家族のことを考える。この掛け替えのない地球という家をどう守るのか。その為には何をしたらいいのか。

その答えのヒントは、エコノミーの「ノミー、ノモス」、すなわちルールの中身にあります。

ある人がキリストにズバリ、「いちばん大切な究極のルールって何ですか」と聞いたと聖書にある。これにキリストがズバリと答えています。その答えは「愛」です。それも自己中心の愛ではなく、相手を思う「アガペー」の愛です。中世になるとこのギリシャ語は「カリタス」というラテン語に訳されました。その英語読みが「チャリティ」です。

キリストはお答えになった後、問うた人にこう語りかけています。「あなたも行って同じようにしなさい」。愛は理屈ではありません。実践です。

ロータリーの皆さんが目指される久遠の平和、チャリティの精神、そして皆の為にという無私の奉仕。まさにそこに答えの全てがあったのです。百年前、シカゴのポール・ハリスさんはそれを見抜いていた。そして実践に移された。そのロータリーの東京四谷クラブにお招き戴き、ご静聴賜りました事、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。